

暖冬の影響に対する今後の農作物の栽培管理について（第2報）

令和2年(2020年)2月18日
農業技術課

【共通】

- 1 農作物の生育や病害虫の発生が早まると予想されるため、農作物やほ場をこまめに観察し、気象や生育状況等の情報収集に努め、適期に作業を行う。また、農業資材は早めに準備しておく。

【水稲】

- 1 ため池や沢水など春先の水田の用水を融雪水に依存する地域では、春作業が本格化する前に、水源地域の積雪状況等に応じて、農業用水の利用に関して地域内で話し合いを行う。
- 2 用排水路の補修や水田内の畦塗り、畦シートの設置等の漏水防止対策を行い、効率的な用水利用に努める。

【麦類】

1 越冬後の生育状況の確認

2月中下旬に生育状況（茎数、幼穂形成の有無・凍死状況等）を確認する。特に、播性の低い品種（シュンライ、ハナマンテン、ゆめかおり）の播種時期の早かったものについては重点的に観察する。

2 対策（←2月中下旬に生育状況を確認後実施する）

(1) 踏圧（生育前進・倒伏対策）

- ア 効果：暖冬等で幼穂分化が進みすぎた場合の生育抑制による有効茎数増加
幼穂形成遅延による凍霜害回避や耐寒性強化
下位節間の伸長抑制による倒伏防止

イ 方法：土壌が乾燥している日中に、50～60kg/m²相当のローラーか足で1～2回踏圧する。

【留意事項】

- ・トラクターによるローラー牽引では、車輪による損傷を最小限とするため、麦畦と直角に走行する。
- ・春先の茎立期後は茎を損傷するため、幼穂形成期までとする。
- ・生育の悪い麦では行わない。
- ・土壌水分の高い粘土質の水田では、土を締めすぎるので行わない。

(2) 追肥(越冬後追肥) ★追肥時期・量については、表1を基本に普及センター、JA等で検討する。

ア 生育量不足（茎数 700 本/m²以下）の場合

- ・茎数不足の場合は、幼穂形成期までに施用する。
- ・本年は、台風の降雨により播種時期が遅くなり、生育量がやや不足しているほ場が多い。このようなほ場では、通常よりやや早めの時期に追肥を実施する。

イ 生育量過多（茎数 1,000 本/m²以上）の場合

- ・越冬障害が少なく生育量の多い場合は、追肥時期を茎立期頃まで遅らせ、量は少なめにする。
- ・生育量が多いものの、黄化している場合は、葉色回復程度に応じて窒素成分で 1 kg/10a 程度を幼穂形成期までに施用する。

表1 麦類の越冬後追肥の基本的な考え方

越冬後の茎数	少なめ(茎数 700 本/m ² 以下)	普通	多め(茎数 1,000 本/m ² 以上)
施用時期	2月下旬～	3月上旬	3月中旬
施肥量	多め	標準量	少なめ

※追肥の標準量は各地域の施肥基準による

【果樹】

1 整枝せん定

- (1) 発芽時期が早まることが予想されるので、せん定作業は早めに終了させる。休眠期（発芽前）防除の実施時期を逸しないよう計画的に作業を進める。
- (2) 核果類は、せん定後の寒気の流入により切り口からの枯れ込みが発生しやすくなるので、幼木や若木は発芽前頃にせん定する。
- (3) ぶどうは、樹液流動（水上げ）前にせん定作業が終わるよう計画的に作業する。

2 加温栽培

今年の果樹試験場（須坂市）の調査によると7.2℃以下の低温遭遇積算の1,200時間の到達日は1月10日（前年1月10日、平年1月4日）、1,400時間の到達日は1月19日（前年1月18日、平年1月13日）で、各到達日ともに平年に比べて6日遅れている。

低温遭遇積算時間を確認して加温栽培を行う。また、露地栽培の生育が早まる場合は、作業が競合しないよう加温開始時期を検討する。

（参考）

「7.2℃以下の低温遭遇積算時間について」（長野県果樹試験場ホームページ）

<https://www.pref.nagano.lg.jp/kajushiken/chosa/teirei/documents/teionsouguu20200120.pdf>

3 樹体凍害防止対策（実施していない場合）

- (1) 核果類では、主幹部へのワラ巻きによる保護を行う。特に幼木期（結実開始期前後の樹齢）が被害に遭いやすいので、保護を徹底する。
- (2) りんご新しい化栽培では、主幹部への白塗剤塗布、可能であればワラ巻きを行う。特に定植後5年間は励行する。

4 その他

- (1) 生育状況をよく観察し、休眠期、発芽前の防除時期を逸しないように注意する。
- (2) 生育前進化に伴い、開花期の凍霜害発生が懸念される。防霜対策として燃焼資材の準備や防霜ファンの稼働点検を早めに行う。

【野菜】

1 育苗管理

冬～早春まきレタス等の育苗で、高温が続いた場合には生育が進み、苗が老化しやすくなるので、ハウス内の換気を励行するなど温度管理に注意し、生育のコントロールに努める。

2 アスパラガス（半促成作型）

ハウス被覆などの保温管理開始後に、ハウス内の土壌が乾燥するので、かん水が可能な場合は20～30mm程度のかん水を実施する（かん水間隔の目安：2～3日に1回。気温が低い場合はかん水回数を少なくする）。

3 ハウス栽培管理（害虫防除）

トマト・キュウリなどのハウス半促成（加温）栽培では、アブラムシやアザミウマ類等の発生が早くなることが予想されるので、害虫の発生状況に留意し、育苗期後半から定植時の害虫防除を励行する。

【花き】

1 育苗管理

春定植を行う品目の育苗では、生育が進み苗が老化しやすくなるので、ハウス内の換気を励行するなど温度管理に注意し、生育のコントロールに努める。

高温下で軟弱徒長した苗は定植後に低温障害や凍霜害を受けやすいので、低温管理による順化を十分に行ってから定植する。

2 施設花きの温度管理

日中、高温になりやすいため、トンネル、カーテン等の開放時間が遅くならないように注意し、十分な換気を行う。一方、晴天時の早朝は、気温が低下しやすいため、無加温ハウスでは保温に留意する。

3 病害虫対策

アブラムシ類等害虫の発生が早くなることが予想されるので、密度が低いうちに防除を徹底する。灰かび病やキクの白さび病等、病害の発生に注意し、早めの防除を行う。

4 夏秋ギクの母株管理

摘心、採穂は株が伸びすぎないうちに、早めに行う。摘心は採穂時期を考えて計画的に行う。採穂時期が早まった場合は、挿し芽適期まで挿し穂を冷蔵庫で貯蔵する。

5 トルコギキョウの定植後管理

定植後、トンネル被覆を行う場合、十分なかん水を行うとともに、晴天時に葉焼けが発生しやすいため、寒冷紗等の被覆を行う。

【畜産】

1 自給飼料

多年生の牧草及び秋播きの単年生牧草、麦類の生育が前進している。今後、収穫適期が早まる恐れがあるので、生育状況をこまめに確認し、収穫作業の準備を早めに行う。